慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 南米アンデス南部高地の言語多様性と口承の語り |
| Sub Title | Linguistic diversity in the Southern Andean Highlands and oral narratives in indigenous languages |
| Author | 藤田, 護(Fujita, Mamoru) |
| Publisher | |
| Publication year | 2025 |
| Jtitle | 科学研究費補助金研究成果報告書 (2024. ) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | 本研究においては、南米アンデスの話者数の多い先住民言語であるアイマラ語とケチュア語のうち、特にアイマラ語について、オーラルヒストリーのテキストを原文対訳の形で公開し、その文体の口承文学との語りとの違いについて考察を行った。また、アイマラ語の口承文学については、隣接するアマゾニアの口承文学との思考方法の違いについて、ブラジルの人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カスト口の理論を参照しながら考察を行った。また、アンデス高地の話者数の少ない先住民言語であるハカル語とウル諸語（特にウチュマタク語）について、それぞれの言語復興の専門家と人脈を構築し、言語再活性化の現状を調査し、報告した。<br>In this research project, in terms of Aymara and Quechua, the two indigenous languages with a large number of speakers in the Andes of South America, we published annotated Aymara oral history texts with translations into Spanish and Japanese, and the differences between their narrative style and that of oral literature were pointed out. Aymara oral literature was also studied with reference to the theories of the Brazilian anthropologist Eduardo Viveiros de Castro on the differences in the way of thinking with the neighbouring Amazonian oral literature. In addition, on the indigenous languages of the Andean highlands with a smaller number of speakers, the Jaqaru and the Uru languages (especially Uchumataqu), the current status of language revitalisation was investigated and reported by establishing contacts with experts in their respective language. |
| Notes | 研究種目：基盤研究 (C) (一般)<br>研究期間：2021～2024<br>課題番号：21K00532<br>研究分野：言語人類学 |
| Genre | Research Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_21K00532seika |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｋ００５３２

研究課題名（和文）南米アンデス南部高地の言語多様性と口承の語り

研究課題名（英文）Linguistic Diversity in the Southern Andean Highlands and Oral Narratives in Indigenous Languages

研究代表者
藤田　護（FUJITA, Mamoru）

慶應義塾大学・環境情報学部（藤沢）・講師

研究者番号：５０７２６３４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、南米アンデスの話者数の多い先住民言語であるアイマラ語とケチュア語のうち、特にアイマラ語について、オーラルヒストリーのテキストを原文対訳の形で公開し、その文体の口承文学との語りとの違いについて考察を行った。また、アイマラ語の口承文学については、隣接するアマゾニアの口承文学との思考方法の違いについて、ブラジルの人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロの理論を参照しながら考察を行った。また、アンデス高地の話者数の少ない先住民言語であるハカル語とウル諸語（特にウチュマタク語）について、それぞれの言語復興の専門家と人脈を構築し、言語再活性化の現状を調査し、報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
21世紀に入り世界の言語多様性が重要な学術的関心を集めるようになり、それぞれの言語における口承の語りの文体研究、および口承の語りを人類学における存在論的転回の理論動向と重ね合わせて解釈する重要性が増しており、本研究はその意味で重要な学術貢献を成す。特にアメリカ大陸の口承文学については日本の研究者の数が少なく、日本口承文芸学会などの学会の場においても高い注目を集める話題でもあり、その意味でも本研究の学術意義と貢献は高いと考えられる。これは言語再活性化とも密接に結びつき、アンデスの少数先住民言語は日本のアイヌ語の取り組みとも共通した課題を抱えており、その意味でも社会的意義のある研究である。

研究成果の概要（英文）：In this research project, in terms of Aymara and Quechua, the two indigenous languages with a large number of speakers in the Andes of South America, we published annotated Aymara oral history texts with translations into Spanish and Japanese, and the differences between their narrative style and that of oral literature were pointed out. Aymara oral literature was also studied with reference to the theories of the Brazilian anthropologist Eduardo Viveiros de Castro on the differences in the way of thinking with the neighbouring Amazonian oral literature. In addition, on the indigenous languages of the Andean highlands with a smaller number of speakers, the Jaqaru and the Uru languages (especially Uchumataqu), the current status of language revitalisation was investigated and reported by establishing contacts with experts in their respective language.

研究分野：言語人類学

キーワード：先住民言語　口承文学　オーラルヒストリー　言語再活性化　語り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

南米アンデス先住民言語の研究においては、研究がケチュア語に集中する状況が長年続いてきている。ケチュア語がアイマラ語と長期にわたる相互接触関係にあり、ケチュア語の主たる音韻・文法特徴の幾つかが、アイマラ語からの複数の段階にわたる影響によって生じたことが、共通認識となっているが、特に口承の語りのメカニズムが両言語間でどのような関係にあるか、特にアイマラ語の語りがケチュア語の語りとどのように異なるかについての詳細な検討が必要であった。

また、アンデス高地において、少なくとも現在知られているケチュア諸語とアイマラ語の口承の語りは、歴史と物語を架橋し、両者を厳密には区別することができない。このようなアンデス高地先住民言語の口承の語りのメカニズムが、アマゾニアの神話を中心にブラジル人人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロによって提唱されているパースペクティヴィズムの考え方（人間以外の諸存在も人間と同じような事物をそれぞれの視点から自らの世界に存在させているとする考え方）とどのような関係にあるか、という問いが重要であった。

また、アンデス南部高地には他の少数派先住民言語も存在し、アイマラ語とケチュア語が南方への広域拡大を始める歴史段階よりも古い時代からの基層言語であったウル・チパヤ語（ボリビア西部オルーロ県ポーポ湖周辺に1500人程度の話者をもつ)やハカル語(アイマラ語と同系統、ペルーのリマ県の山間部に 1000 人程度の話者をもつ）への着目も重要な課題であった。

２．研究の目的

本研究では､現代アンデス高地先住民社会における多言語状況に着目し､アイマラ語について、これまでの申請者の研究地域であるラ・パス県エル・アルト市やラ・パス県ムリーリョ郡渓谷部農村から、地理的範囲を他の川筋の渓谷部及びパカヘス郡高原部へと拡大しつつ、対象言語をアンデス高地の少数言語のウル・チパヤ語へ拡大して、資料の収集と分析に取り組むことを目的とした。これらの言語で口承の物語（口承文学）を調査・録音し、その語りの特徴を特に証拠性に着目して比較検討するとともに、その語りにおいて人間が動物、事物、他の人間集団との間でどのような関係を展開していると表現されるかなどを検討することが目指された。

また、それらの言語での語りのメカニズムを明らかにしつつ、物語世界を考察することで、人間と動物を含む諸存在がそこでどのように表現されているかについての、より詳細な考察が可能になる。これは、パースペクティヴィズムがそれぞれの先住民社会でどのような形でどのように表現されるかについての類型を差異化し、そこから歴史的経緯を仮説として立てる先駆的研究を可能にする。従来、ヴィヴェイロス・デ・カストロと、彼が着想の源泉として依拠するレヴィ・ストロースは、アマゾニアを研究の中心としながら、隣接するアンデス高地を扱うことがなかったが､申請者のアンデス口承文学についての知識と記録の蓄積をもとに、この課題に取り組むことがもう一つの目的であった。

３．研究の方法

本研究は、フィールドワークを中心とする研究であり、定期的な現地調査と現地調査における地理的範囲の拡大を目指し、そこでの調査と録音作業を行った。また、以前の時代に記録されながらそのままになっている録音を回復する作業も行った。具体的には、アイマラ語の調査については、これまでのリオ・アバホ渓谷からサパーキ・ルリバイ渓谷（いずれもボリビア・ラパス県）へと調査範囲を広げるとともに、当初申請に記していたウル・チパヤ語についての人脈形成がうまく進まなかったため、同じウル系言語で危機の深刻度がより高いウクマタク語（チチカカ湖からがデスアグアデロ川が出る川べりのイルイト村に居住し､流暢な話者は既にいない)に着目し、人脈を新たに構築するとともに、同イルイト村で言語再活性化のボリビア教育省のポストにある者と協力して現地でワークショップを開催しつつ、同言語の現状と課題を把握することに努めた。またペルーのリマ県中央山間部で話されるハカル語についても、ペルー教育省と連携して仕事をしている当該言語の専門家から継続的に情報収集を行った。

４．研究成果

（１）アイマラ語のオーラルヒストリーと口承文学のあいだの文体差の比較研究

当初からの調査地であるリオ・アバホ渓谷において記録された音声資料をもとに、オーラルヒストリーと口承文学の語りのあいだにどのような文体差が存在するかについての比較研究を行った。アイマラ語は情報源（証拠性）を細かく示すことが文法的に要求される言語であり、これまでも口承文学の語りにおいて遠隔過去（pasado remoto）と推量（inferencial）を示す動詞の形式が「言う」を意味する動詞 saña と組み合わされて用いられることが分かっていたが、オーラルヒストリーになると人から聞いた話の場合には遠隔過去と動詞 saña が引き続き用いられるが、推量が用いられなくなり、自身が体験した話の場合には、近接過去（pasado cercano）と習慣的行為を示す動詞の形式の組み合わせが頻繁に用いられるようになることが確認された。これは「口承文学」と「オーラルヒストリー」という（外部から導入された）

区分により文体が区別されるわけではなく、話者によって認識された現実からの距離感によって文体が区別されており、区分としても二つではなく、よりスペクトラムの形式に近い文体の区分が存在することが示唆された。
　この点については、既に研究期間内にアンデス・アマゾン学会の学会誌にテキストと論考を発表しているが（「ボリビア・ラパス県渓谷部のアイマラ語口承テクストと考察――キリワヤのアシエンダ女領主による横暴のオーラルヒストリー」『アンデス・アマゾン研究』7、2023 年）、引き続き他のテキストでも検証を続けており、夢についての語りへと対象を拡大することを予定している。

（２）アイマラ語及びケチュア語での更なる記録の収集
　こちらは発表までにまだ時間がかかるが、アイマラ語及びケチュア語でのさらなる音声記録の収集にも取り組んだ。アイマラ語では、当初予定通り、以前より調査を行っていたリオ・アバホ渓谷からサパーキ・ルリバイ渓谷へと調査地を広げ、特にチュリュパ（古い時代から残ってきた死者の埋葬設備）やアンデス地域における人身供儀（必ずしも実際に行われていたかどうかは明らかではない）に関する様々な伝承をアイマラ語で記録するとともに、アイマラ語の日常会話の記録も話者たちの合意の下で記録することができた。また、アイマラ語話者のスペイン語での会話についても話者たちの合意の下で記録することを行った。これらは日常会話での語用論的な目的での様々なアイマラ語の接尾辞の複雑な使用や、アイマラ語とスペイン語の接触状況での言語変容を考察する機会が得られるため（アイマラ語についてはこの点がほとんど検討されていない）貴重な記録であり、既にデータの整理に着手している。またケチュア語についても小規模ではあるが、ペルーのクスコ県カルカ市において録音を行い、またボリビアのチチカカ湖東岸地域での調査に向けて人脈形成を行った。

（３）アイマラ語口承文学とアマゾニア口承文学との差異についての研究
　当初の目的にあった、アンデス高地のアイマラ語口承文学をエドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロのアマゾニア口承文学についての文化人類学的議論と比較しながら検討する課題についても、着実な研究の進展をみた。元々アマゾニアの口承文学は、典型的には、（１）それぞれの（動物などの）種が自身をその本質においては人間だと思っていて、（２）それぞれの生息域においては人間と同様の文化的生活を営んでおり、（３）人間の前に出るときのみ、その種の特有の外見（動物としての肉と毛皮など）をまとって立ち現れ、（４）人間にとってとは異なる物が、しかしその種にとっての同等の文化的事物として存在している（例：葉の上で発酵した水は猿にとってのビールである）、といった特徴が知られていたが（パースペクティビズムや多自然主義といった用語で形容される）、これがアイマラ語口承文学においては共有された特徴ではなく、むしろ（１）それぞれの種が自身を人間にとっての他者であると位置づけており、（２）動物たちはそれぞれの生息域においては、人間の側からの視点では「野蛮」とでも位置づけられるような生活を営んでおり、（３）人間を騙すために人間の姿をして人間の前に立ち現れ、その正体は動物の側から明かされない限りは人間に気づかれることはなく、（４）動物や魔物が人間の食べ物を装ってふるまったものは、後から屑や糞であることが判明するといったかたちで、人間と動物のあいだの切断がより深く走っていることが明らかになった。
　興味深いことに、日本社会の文脈では、アマゾニアの口承文学はアイヌの口承文学と類似しており、アンデス高地の口承文学は和人（アイヌではない日本人）の口承文学と類似しているようである。現時点では、この差異が国家をもたなかった社会集団と国家をもった社会集団の違いに対応するのではないかとの仮説を（他の考古学分野などからの知見も得て）立てている。
　この点については、共著内の分担執筆として（「口承の物語に現れる人間と動物の関係を読み直す――南米アンデス高地のアイマラ語と北東アジアのアイヌ語の物語テクストから」宮代康丈、山本薫編著『言語文化とコミュニケーション（シリーズ総合政策学をひらく）』慶應義塾大学出版会、2023 年）、および概説書のなかの分担執筆として（「先住民の口承文芸―「物語」と「歴史」の枠を超えて展開する語りの世界」大島正裕編著『ボリビアを知るための 65 章（第 3 版）』明石書店、2025 年）において成果を公にしたが、より詳細な検討が必要とされており、今後も引き続き取り組みを展開したいと考えている。

（４）先住民言語からみたウェルビーイングに関する研究
　これは本研究からの派生的な成果ではあるが、アイマラ語によるこれまでの様々な聞き取り作業の蓄積の下に、先住民発のウェルビーイング概念として近年ラテンアメリカで注目を集めつつある「ビビールビエン」（日本語では「よく生きる」）についての考察を行った。アイマラ語ではこれはスマ・カマーニャ（suma qamaña）と表現されるが、この qamaña「生きる」が「分かち合う」という意味をもつことを基軸として、「生きる」を意味する他の動詞 jakaña、sarnaqaña および utjaña との比較考察をアイマラ語話者らとの協働で行った。特に「生命」に近い意味をもつ jakaña と、「歩く」という意味ももち「人生の軌跡」をも示しうる sarnaqaña と組み合わせると、生命（いのち）、分配（共生）、人生（軌跡、動態）が「生きる」に関する概念の連関としてアイマラ語では示されていることになる。これがウェルビーイングについて新しい捉え方を示している可能性があることを指摘し、提案した（「『よく生きる（ブエンビビール）』という理

念を問い直す――先住民の言葉と視点から何を学ぶことができるか」桑原武夫、清水唯一朗編著総合政策学の方法論的展開（シリーズ総合政策学をひらく）』慶應義塾大学出版会、2023 年）。この路線の研究も先住民言語からの発想の広がりを探求する上で重要であり、今後に向けて継続したいと考えている。

（５）アンデス高地のマイノリティ先住民言語に関する研究

アンデス高地には、ケチュア語やアイマラ語などのマジョリティ先住民言語（このそれぞれが複数の言語から構成されると考えられるようにもなってきているが）とは別に、アイマラ語と同系統のハカル語（ペルーのリマ県南部ヤウヨス郡で話されている）とウル系言語であるウチュマタク語（チチカカ湖から出るデスアグアデロ川沿いのイルイト村で話される、流暢な話者は既にいない）とウルチパヤ語（さらに南部で話される、話者約 1500 人）がある。本研究では、口承の語りなどを録音するまでには至らなかったが、ハカル語についてはペルー教育省と連携して言語再活性化のための教材作成を手がけるハカル出身の先住民専門家との人脈形成に立脚して、ペルーでの言語再活性化の取り組みの政策的困難や最新の教材作成動向についてヒアリングを行い、ウチュマタク語についてもボリビア教育省から言語再活性化の専門家として任命されたイルイト村出身のウルの先住民専門家と連携して、言語再活性化のワークショップを村で実施し、村での取り組みの最先端の状況を体験的に調査する機会を得た。

この研究成果は、日本口承文芸学会の学会誌において、アンデス高地と日本のアイヌ語の言語再活性化の課題を比較考察する論考のなかで示し（「南米アンデス高地における先住民言語と口承文芸のいまと未来」『口承文芸研究』46、2023 年）、概説書のなかの分担執筆として（「アイマラとウルーアンデス高地の先住民」大島正裕編著『ボリビアを知るための 65 章（第 3 版）』明石書店、2025 年）において成果を公にした。ただし、この研究テーマについてもまだ端緒についたばかりとも言え、引き続き状況の展開を注視したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤田護 | ４．巻<br>46 |
| ２．論文標題<br>南米アンデス高地における先住民言語と口承文芸のいまと未来 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>口承文芸研究 | ６．最初と最後の頁<br>5-14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Mamoru Fujita | ４．巻<br>5 |
| ２．論文標題<br>La dina'mica oral en De cuando en cuando Saturnina de Spedding | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>Samiri: Revista de Taller de Historia Oral Andina | ６．最初と最後の頁<br>151-162 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>フリアン・タピア、アスンタ・タピア・デ・アルバレス、藤田護 | ４．巻<br>7 |
| ２．論文標題<br>ボリビア・ラパス県渓谷部のアイマラ語口承テクストと考察――キリワヤのアシエンダ女領主による横暴のオーラルヒストリー | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>アンデス・アマゾン研究 | ６．最初と最後の頁<br>19-51 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>岩堀卓也，パリーク亜美，藤田護，大木聖子 | ４．巻<br>21(2) |
| ２．論文標題<br>ラテンアメリカの多文化主義政策と日本の防災教育ワークショップの 交わる地点で――メキシコとペルーにおける災害認識とナラティブ、コミュ ニケーターの役割、先住民知と近代科学技術の関わり | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>Keio SFC Journal | ６．最初と最後の頁<br>144-167 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Mamoru Fujita |
| 2．発表標題<br>La historia oral aymara como filosofi'a de vivir |
| 3．学会等名<br>Congreso Internacional Transdisciplinario "Desafi'os en la Diversidad (IV)" ----- Lenguas y variedades en desplazamiento: Documentacio'n-revitalizacio'n con justicia social（招待講演）（国際学会） |
| 4．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>藤田護 |
| 2．発表標題<br>南米アンデス高地における口承文芸のいまと未来 |
| 3．学会等名<br>日本口承文芸学会第46回大会（招待講演） |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>FUJITA, Mamoru |
| 2．発表標題<br>La relacion con los animales en las narraciones orales aymaras (Bolivia) y aynus (Japon) |
| 3．学会等名<br>XV Congreso de la Jornadas Andinas de Literatura Latinoamericana (JALLA)（国際学会） |
| 4．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計3件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>宮代 康丈、山本 薫、今井 むつみ、大堀 壽夫、國枝 孝弘、藤田 護、髙木 丈也、中浜 優子、杉原 由美、白頭 宏美、藁谷 郁美、鄭 浩瀾、野中 葉、西川 葉澄、大木 聖子、杉本 なおみ | 4．発行年<br>2023年 |
| 2．出版社<br>慶應義塾大学出版会 | 5．総ページ数<br>- |
| 3．書名<br>言語文化とコミュニケーション | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>桑原 武夫、清水 唯一朗、國領 二郎、井庭 崇、金沢 篤、加藤 文俊、諏訪 正樹、石川 初、森 さち子、篠原 舟吾、小熊 英二、島津 明人、藤田 護 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>慶應義塾大学出版会 | ５．総ページ数<br>- |
| ３．書名<br>総合政策学の方法論的展開 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>大島　正裕 | ４．発行年<br>2025年 |
| ２．出版社<br>明石書店 | ５．総ページ数<br>388 |
| ３．書名<br>ボリビアを知るための65章【第3版】 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|